

近代 史学的方法 VS.ハディース方法 (3/5) : ハディース方法

5.0

明:

史の において用いられる近代的方法 と、ハディースにおいて用いられるものとの比 。第三部: ハディースにおいて用いられる方法 について。

目: [事言者ムハンマド彼の言 に して](#)

より: リ ム アッザ ム

日 05 Sep 2011

集日 05 Sep 2011



言者のハディースとは、言者ムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）からの、または彼に する 告のことを指し、ムスリムはアハディース（ハディースの 数形）を通して人生における言者の道であるスンナについて知ることが出来ます。この知 は、ムスリムの最も基本的な宗教的要件を たすために必要であり、言者自身生前に、この知 を めることを指示 しました。

言者は彼の教友たちに し、反 、 、口述、 践して せることなどによる 々な方法によって 教えを きました。そして彼らに してそうした 、彼らが何を学んだのかを いました。教 友たちだけでなく、外国からの派遣 もクルア ンとスンナの教育を受けました。言者は 彼らに しても、彼らが何を学んだのかを しました (Azami 9) 。さらに、言者によって送付された のいくつかは法的 の にまで及ぶ 文で、スンナの 授

方法についても叙述していました。言者には一、少なくとも45人の代官が居たため、文は一般的に大量にされていたとされています（Azami 10）。彼がアリブンアビタリブといった教友たちにも口授したり、彼の教の写しを特定の人々に送付したりしたことも知られています。また、他にも非常に重要なこととして、彼が追者たちに明に指示したように、彼の方法を模させたことことがげられます（「私の行うように礼をしなさい」〔ブハリ第一、11、604番〕、「巡礼の礼は私から学びなさい」〔サヒフムスリム、ハッジの、310番〕）。また彼は者にし、彼と共に滞在し、彼自身を察して学するようめたことが知られています（Azami 10）。

スンナの知をめるために言者によって用いられた他の方法には、学校とも言える数の施の立がありました。それらは言者のマディナ到来もなく立され、また彼は方の々な所へと教を派遣したりもしました。彼は教友たちにし、彼にする知をするようし、次のように言ったことがえられています：「たとえそれが一つのであれ、私からの知をえるのです」（Azami 10）。また彼の有名な「れの教」では、次のように言ったことがえられています：「（ここに）今いる者たちは、いない者たちにこの教をえるのです。」（ブハリ第2、26、795番）。このように教友たちのでは、不在の者たちに言者の言行について告知させることが一般的な行でした。また、言者は派遣した代表にし、彼らが国にしたには、地で学んだことを人々に教えるよう明に指示したのです。彼は教えることと学ぶことによって得られる大きなと、それを拒否したに起こり得るについて告げることにより、これらすべての行いを推しました（Azami 12）。

言者の教友たちにしては、彼らのし、尊敬した人物をいかに彼らが察し、模することに念したかが特されるべきでしょう。教友たちによる言者への情は、言者を守るためなら彼らの多くが躊躇することなく死んだ程だったことなどにより、よく知られています。このことを含め、彼らの卓越した力と、言者自身が自らのスンナを教えるために用いた々な方法とを考すれば、彼らが言者のスンナを熟知していたことは想像にくありません。事、彼らはそれを学ぼうとしただけでなく、暗やなどの々な方法を使用してそれを保持しようとしたことが告されているのです。言者の教友たちがお互いに暗に励み、言者から学んだばかりのことを践していた多数の例もあります（Azami

13)。彼らの多くはハディースをしたことで知られ、言者の指示によって彼から学んだことを元に、彼を模していました。言者の死も、彼から学んだことの暗、践と保持を彼らがけていたことを明する数の告があります。さらに、アリブンアビタリブ、イブンマスウド、アブサイドアル＝フドリなどの教友たちが、世代にしてハディースの暗をするようアドバイスしたことを示す告もあります。彼らは人的にだけでなく、集レベルでもその暗をしていたのです (Azami 15)。

言者の死、イスラムはアラビア半を超えた隔の地にもまりをせました。言者の教友たちがにおける先者たちだったため、ハディースの知は彼らと共にがり、そのすべてがマディナに留まったのではありませんでした。それゆえ、隔の地にたどり着いてそこに定住した特定の教友たちに、他の地域には知られていなかった一部のスンナが知られていた可能性はあります。既述のように、教友たちは彼らの世代がハディースの学と保持をけ、それが失われないようにされるのをしたのです。しかし、その点でスンナの知は一ヶ所に集中してはおらず、ムスリム世界の各地に散していたため、ちが加えられる可能性がしました。特に「第一のフィトナ（：つまりイスラム国家の乱と分裂）」のには、批の技法がされる必然性が出てきたのです (Azami 49)。それに加え、スンナの散と共に、ハディース学の新しい技法もされなければなりません。

ハディースの保持においてはすべての技法が重要なものでしたが、教が生徒にみ上げる践法は初期にされ、とりわけ重要なものでした。これには、教による生徒の本からのみ上げも含まれました。その本とは、教がき取らせたものの完全な、あるいは部分的な写でした (Azami

17)。生徒や学者らは、教にしてみ上げる前に、本全体において故意にハディースを入ることによって、教の力量をしました。それらの追加をしなかった教らは「公然と非され、信性に欠けることが宣言」されたのです (Azami

17)。それに加え、生徒による教へのみ上げの技法は、二世初から最も一般的な践法になっていたと言われていています (Azami

19)。これは他の生徒たちが同席する中で行われ、彼らは自分たちの本の中にあるものと他の生徒のものとを比べるか、または注意深くいていたのです。彼らは通常、写

においては各ハディースの に丸印を付け、教 にしてハディースが まれると、それを示すために印を りつぶしたと言われていました。また、ハディースが教 にして み上げられると、その印が付けられ、 には学者たちが同じ本を何度も み返したのです。その理由はアラブ 写本に 抗するためだったのではないかと られています。さらに、ごく初期から、写の再 にする必要性が明白にされ、教 たちは生徒たちの 写における ちの排除を手助けしたと 告されています。自分の本を教えること、または 纂することにおいて 切な方法にわなかった人物は、たとえ 料が真正のものであったとしても、ハディースを盗用したと 非 されるでしょう。したがって、ハディースが正しい手 によって得られたということは 極めて重要なことだったのです。他にもいくつかの技法が存在しますが、この 考の目的としても、ハディース学者がハディース において、それを 授する技法によって特 な用 を用いていたことを知るのは重要でしょう。また言及に することとしては、それらの特 な用（「ハッダサナ（彼は我々に、 とした）」、「アフバラナ（彼は我々に、 とえた）」、「アン（ によると）」）は、 程が 格に口 のみであったことを示すのだと 勘 いされがちですが、 にはそうではなかったことが 明されています。

Footnotes:

1

Azami, Muhammad. *Studies in hadeeth Methodology and Literature*. Indiana: American Trust, 1977.

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/941>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。